高橋　彰一（たかはし・しょういち）

１、プロフィール

　若い日に小説家を志し東京で同人誌「信天翁」（あほうどり）を主宰して小説を発表。帰郷した弘前で「津軽書房」をおこし、地方出版の草分けとして全国的に高く評価された。

＜生没＞

　1928（昭和３）年８月 31 日～1999（平成 11）年１月 18 日

＜代表作＞

　津軽書房出版物 480 点。長部日出雄の直木賞受賞作『津軽世去れ節』（1972 年）。『葛西善蔵全集』4巻（1975 年）。

＜青森との関わり＞

　全国にさきがけて弘前で出版事業を起こし、中央や地方作家の作品を出版して青森県の文化向上に尽くした。

２、作家解説

　高橋彰一は教師の父芳一と母ユキの長男として弘前市に生まれた。母は弘前・京徳寺の長女で教員だった。2歳のとき炉裏の炭火で右手の薬指と小指を火傷し、中学校時代から劣等意識をもち始め生涯のひけめになったという。昭和 20（1945）年県立青森中学校卒業。25 年まで中津軽郡岩木村岳暘小学校と弘前市朝陽小学校の代用教員となる。その間鷗外・漱石・トルストイや哲学書を多く読んだ。太宰を知り「頭から押さえつけられていたものから開放される喜びでありショック」「私の文学事始めであり太宰によって文学青年になりその後を決めることになった」と後年述べている。

　父の勧めもあり 25 年に上京、文化学院文科に入学し 27 年卒業。広告代理店に就職したが3ヶ月で退社、以後は教科書会社や出版社で編集・校正を手伝い文学青年の生活に明け暮れた。28 年から 31 年まで文芸同人誌「信天翁」（あほう

どり)を主宰、編集し 11 冊を出した。太宰の随想集「信天翁」と同題である。高橋の小説に、太宰の「魚服記」を思わせる作品があり太宰の影響が深い。37 年弘前に帰郷。友人の古書店をひきつぎ翌年上京、審美社に勤務。「太宰治研究」を編集し太宰の単行本も手がけ本をつくる楽しさと実務体験がのち役立つことになる。39 年帰郷し高木恭造や一戸謙三の方言詩集「津軽の詩」を出版。予想以上に売れて同年津軽書房を創立し出版活動に発展し、「ふるさとの歴史」「入門太宰治」を刊行。47 年長部日出雄「津軽世去れ節」を出版、翌年直木賞を受賞し津軽書房は全国を対象に仕事をするようになった。

高木恭造、笹森貞二、千葉寿夫らがメンバーの同人誌「心象」を 53 年から 57 年まで編集、津軽書房から発行した。54 年東北出版人懇談会会長に推され東北の本フェアを東北主要都市で開催、57 年全国ふるさとの本まつりを東京で成功させた。55 年弘前市シルバー卍賞、58 年サントリー地域文化賞、平成 10(1998)年東奥賞を受賞。59 年に経済的挫折から心機一転を図って自伝的小説「津軽で」133 回を陸奥新報に連載した。

津軽書房 34 年間の出版物は 480 点、福士幸次郎著作集、葛西善蔵全集、今官一作品集などの貴重な出版、中央出版では採算のとれない地方や中央の埋もれた作家もとりあげた。高橋は地方出版という語に対して、「地方の出版物にもいいものがある」と考える差別を感じると語っている。

高橋は、出版事業を始めた時期には「地域社会のためとか、津軽の文化向上に役立とうとか、そんな大それた姿勢、理念なりを持ち合わせてはいなかった」と述べている。そして後に「その地域でなければ成し得ないテーマを、著者と一緒になって取り組み、真の普遍性と強靭さをしっかりと内在させた本」の出版を考えた。

長部日出雄は「本が好きという夢を純粋に貫き通した日本一の文学青年」と高橋彰一の死を悼んだ。

3、資料紹介

○「信天翁」

雑誌

1953（昭和 28）年〜1956（昭和 31）年

135 ㎜×200 ㎜

太宰治に心酔し小説家を志した高橋は東京・文化学院を卒業、文芸同人雑誌「信天翁」を主宰、編集した。本格小説をめざし同人は大高正博、星野潤らで木山捷平、今官一、小山清らが寄稿した。太宰の随想集「信天翁」と同題で高橋の小説修業時代が知られる。